

講義に歌を用いることによる共感的理解の深まりとその教育効果 -子ども教育にたずさわる学生への感性を育む講義展開法の研究-*

岩 倉 政 城**

Deepening and the educative effect of empathic understanding by using song to lecture
-Research of lecture development method that brings up sensibility to student involved in
child education-

Masaki Iwakura

子どもの教育にたずさわる学生の講義に歌を導入することで講義の理解と、テーマについての共感的理解が促進されることを実証する研究をおこなった。短期大学部保育科1年生後期「保育内容と指導法-健康」受講生151名を前後2群(実験群・対照群)に分け、「虐待」をテーマに授業を行った。実験群には虐待児を唄う歌を、対照群には歌を用いないで講義した。4週後に虐待児特性について質問し、正答数を比較し、統計学的有意差で歌を用いた群の正答が多かった。歌が虐待の理解に役立つと答えた者は98.6%に達した。歌が理解に役立った理由の自由記載では、「言葉と違って心に・体にすーと入ってくる」、などの回答が71%を占め、また虐待児への共感的理解を示す記述が47.8%に達した。言語が主な伝達手段である講義は学生に知識はもたらすものの共感的理解に至るには限界がある。講義に、より感性や情緒に訴求しやすい音楽などを用いることで、子ども教育にたずさわるにふさわしい学生の育成にも貢献するものと思われる。

キーワード：歌、講義展開、共感的理解、感性

I 問題と目的

子どもの教育にたずさわろうとする本学子ども学科学生への育成目標は「子どもの全人的な発達に向けた支援ができる人材を養成する」¹⁾ ことにある。そのための教育的接近法として理論系と表現系のカリキュラムが車の両輪をなして提供されている。しかし筆者が子ども学系の教育に加わってから参加した全国保育士養成校協議会研究大会では、分科会が細分され、例えば音楽教育ならば発表者

や討論者も音楽系教員で構成され、幼児教育論、精神保健などの理論系教員の交流的な討論は見あたらなかった。しかし筒石ら²⁾は小学校教員養成科目の音楽について、「子どもたちへの美的情操・感情体験等を育成する側面から、また学生の全人的教育に資するために必要」と述べている。このことは資格試験に音楽の課題が課せられているから学ぶという次元ではない保育士・教員の必須の資質として求められていることを示している。子どもが発する繊細なサインを科学的で、かつ

2010年9月15日受理

*この論文内容の一部は2009年第48回全国保育士養成協議会研究大会で発表した。

**尚綱学院大学 教授

情緒的な視点で読み取り、今この瞬間にその子に最適な「再近接発達領域」³⁾を見つけ出して提供し、発達をうながす能力が保育士・教員に求められる。この際、科学的な眼力だけではなく子どもの情緒に共感できる情緒性が子ども学科教育を通して高められることが意図されねばならない。教える側の便宜で別個に授業される理論系と表現系の教育は、可能であれば統合された形で学生に提示されるなら、その授業の理解が科学的だけでなく情緒的にも深まることが考えられる。著者は理論系授業「子どもの保健」、「精神保健」と「基盤演習Ⅰ」を受け持つかわら「保育内容と指導法-健康」の授業の一部を担った。こうした教科は科学的実証的講義展開が求められる。しかしこうした理論を展開する授業を言語を媒介におこなうと、その難解さや平板さで、しばしば学生の集中や学ぶ意欲を削ぐ結果となる。その工夫として汎用されるパワーポイントなどによる映像的訴求も、映像文化に馴れた世代には冗漫に映ることも体験してきた⁴⁾。大学の教員は科学的な知識を集積しており、かつそれを多義的に理解し情緒的に醸成し、学問的な個々の課題に対応した表象世界を内面に用意している。しかしこれを伝える手段が言葉や文字資料に限定された途端、学生には言語情報としてしか届かない。それは知識としては入力されても、教師が言語を通して伝えたかった教師自身の表象世界の大部分が落ちてしまい、学生に深い印象として残らないのはお互いに残念である。こうした考えから筆者は音楽（主に歌）や詩、絵画、描画などの表現系ツールを授業に組み込むことを試みてきた。本論ではこのうち歌を援用した授業展開を通して学生の科学的理解の促進だけでなく共感的理解が促進される可能性について検討したので報告する。

本論の目的は1)子どもの精神世界に届く共感的理解の能力が高い学生を育てる上で授業に音楽を用いる有用性。2)理論系授業の

論理性を言語で伝える間におこる難解さと冗漫さを克服する手段としての音楽の可能性。3)理論系・表現系という教育の便宜的棲み分けから、両教科担当教員間で授業展開を分かち合う子ども学科の講義モデルへの試み。以上の問題意識を持ってこの研究に取り組んだ。

Ⅱ 対象と方法

対象

本学2008年度入学短期大学保育科学生で1年生後期「保育内容と指導法-健康」受講生151名を前後2群に分け、前半を実験群(70名)として同日1限目、後半を対照群(81名)として同日2時限目に授業を行った。1、2限間の10分の休憩時間に両群が互いの授業情報を交換しないよう両使用教室を遠隔にして行った。

方法

授業内容は「保育内容と指導法-健康」のうち講義題「虐待」で行った授業を採用した。実験群・対照群についてA4サイズ2枚のレジュメを配布して授業を行った。レジュメ内容は1.虐待事例の新聞切り抜き、被虐待児の年齢別死亡統計、2.子育て支援センターでの虐待母へのカウンセリング事例紹介、3.虐待防止に関する法令、4.虐待の定義と分類、5.被虐待児症状、6.虐待の結果として起こる被虐待児の特性、7.虐待防止に果たす保育者の役割、を記載したものであった。

実験群には、引き続きA4サイズ1枚の英語の歌詩“Luka”作詞作曲Suzanne Vegaと4つの課題を記入したものを配布し、一度CDで全曲を鑑賞させた。なお、この曲は1980年代アメリカ全土で乳幼児への虐待が社会問題となり虐待事例報道に心を痛めた Singer-songwriter の Suzanne Vega が被虐待幼児の心情を歌に託して1985年に発表したものである。また、学生の翻訳の便宜のため

いくつかの単語の訳も付け加えた。

歌詞の一部のみを記載する。

“Luka” AGF Music Ltd.& Waifersongs Ltd.1986.

My name is Luka

I live upstairs from you

If you hear something late at night

Some kind of trouble, some kind of fight

Just don't ask me what it was

I think It's because I'm clumsy

They only hit until you cry

And after that you don't ask why

You just don't argue anymore

Yes I think I'm okay

I walked into the door again

I guess I'd like to be alone

With nothing broken, nothing thrown

課題は、

1. Lukaはどんな目に遭っているのか。
2. Lukaは誰と話しているのだろう。
3. 何が起きているかを具体的には言わないで、Some kind of trouble, some kind of fightと表現しているのはなぜだろう。
4. Lukaはこんな目に遭っているのは誰のせいだと言っているのか。
5. Lukaはなぜ暴力あふれる自分の家に戻って行くのだろう。

であった。

全曲を鑑賞させた後、受講生を5人前後のグループに分け1～2行ずつ手分けして和訳課題を与え、各グループから翻訳を発表させ、不十分な訳には著者が補足して歌詞の全体像を理解させた。次いで5つ課題に添って全体で討論させた。その後、再度曲を鑑賞させて終了とした。音楽課題の提示から終了までの所要時間は授業90分のうち、25分であった。

なお、対照群は音楽を用いないでより丁寧な虐待解説を加え、両群とも90分で終了した。

この授業の4週間後に、無記名による質問

紙調査をおこなった。すなわち実験群には以下の課題を与えた。

1. 虐待を受けた子の特徴を書けるだけ書きなさい。
2. Lukaの曲を聴いたことは虐待の理解に役立ちましたか、を(1)役に立った(2)どちらかというと役に立った、(3)どちらかというと役に立たなかった(4)役に立たなかった、の4択で回答させた。
3. 曲を聴くことが理解に役立った人はなぜ理解に役立ったかを書きなさい、を自由記述で記入させた。記載が長大にならないように記入スペースはA4縦配置で横2行に止めた。

対照群には1.虐待を受けた子の特徴を書けるだけ書きなさい、の課題のみを与えた。対照群には質問紙回収後に実験群と同様の音楽課題、すなわちCD全曲鑑賞、グループによる和訳課題、5項目にわたる課題と討論、再度の曲鑑賞を実施し、両群の教授内容の不平等の解消に努めた。

質問紙の配布から回収までの時間を20分とした。対照群では質問項目が少ないことから数分で書き終えたものがあり10分で回収となった。

なお、この研究は尚絅学院大学人間対象の研究・調査に関する倫理審査委員会での了承により実施し、質問紙調査用紙配布前に研究承諾書を対象学生から回収した上で実施した。

Ⅲ 結果

本研究の質問紙調査についての研究承諾書に受講者の100%から承諾の回答を得た。

問1.虐待を受けた子の特徴を書けるだけ書きなさい、の課題に両群で正答した個数を図1に示した。実験群で平均5.20個(最大9個、最小2個)、対照群では平均4.06個(最大8個、最小0個)であった。両群の平均値

の差の t 検定では危険率 5% 以下の統計学的有意差で、歌を聴くことが虐待を受けた子の特徴記銘に効果があることが認められた。正答の内容は外傷の存在、発育遅滞、対人不安、他者との交流不全、自発性の減退、自罰傾向、虐待者秘匿、被虐待事実の秘匿、無表情、易怒性、低い自己評価、アイコンタクト不全、など多岐にわたった。とくに音楽を聴いた実験群では自己開示の抑制、低い自己評価、被虐待事実の秘匿、虐待者秘匿（親をかばう）、自罰傾向など、歌詞の内容に関わる項目が目立った。

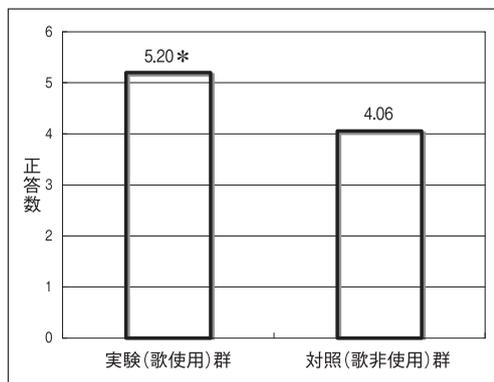


図1 歌使用群と非使用群の「虐待を受けた子の特徴を書けるだけ書きなさい」、に対する正答個数の比較 * : $p < 0.05$ で有意

問2. 「Lukaの曲を聴いたことは虐待の理解に役立ちましたか」、に対する回答を図2に示した。役に立ったが53名(75.7%)、どちらかというと役に立ったが16名(22.9%)、どちらかというと役に立たなかったが0名、役に立たなかったが1名(1.4%)であった。したがって音楽の効用を肯定したものは併せて79名(98.6%)であった。

問3. についての自由記載は記入スペース制限の結果、最大100文字以内の短文であった。「曲を聴くことが理解に役立った人はなぜ理解に役立ったかを書きなさい」には、役立つと応えた69名全員が回答した。その主な記載内容にそって内容別に分類したものを

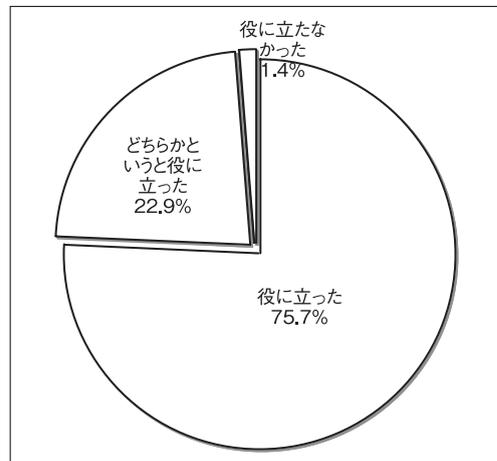


図2 曲を聴いたことは虐待の理解に役立ちましたかの回答

図3に示した。一つ一つの記述には分類した各内容が重なっているため重複して集計した。最も多い記述は、言葉の講義に比べて歌が入ると内容がしっかり伝わる、とする①「音楽が伝わる」で、その代表的記述は「講義の文字や話しに比べ、音楽が心にストレートに入ってくる」、「曲の方が言葉に色がついて心に入りやすい」、「話すだけではなく曲を聴くことで音楽だからこそ伝わってくる」などで、49名(71.0%)を占めた。歌の伝わりやすさを表現する「心」や「体」などに「入る」などの記載も目立ち、②「心に入る・体に入る」に分類される記述は22名(31.9%)であった。「被虐待児の心の世界が目浮かぶ」などの③「情景が浮かぶ」に分類される記述は16名(23.2%)であった。④「虐待理解の深化」に分類される記述は33名(47.8%)と、約半数に達し、その代表的な記載は「虐待では起こる理由、見つけ方、予防法ばかりに目を向けていた。曲を聴いて始めて子どもの気持ちを理解していなかった自分に気付いた」との感想であった。歌を聴くことによって被虐待児童の苦悩に共感的な理解を示す⑤「被虐待児への同化」に分類される記述は33名(47.8%)と、これもほぼ半数であった。その代表的な記載は「歌を聴いて実際にこの曲を聴くと自分

の中にすんなり入ってきて理解しやすい。まるで被虐待児の立場に立てたような気がする。このような子が沢山いて、それを歌にもできず気持ちを抑えている子の未来が心配。」との感想であった。また、曲と共にある歌詞を記述に取り上げた例があり⑥「歌詞の効果」に分類される記述は13名(18.8%)であった。その例としては「歌詞そのものが被虐待児の叫びや心の言葉となっていて、心境が入ってきやすかった。」とするもので、曲と歌詞が相まって理解を深めていた。この授業では英語の歌詞を学生に和訳させたが⑦「和訳の効果」を記述する例が8名(11.6%)にみられ、感想の一つは「和訳しているうちに歌詞がストレートに伝わってきてLukaの気持ちをそのまま感じた。曲で深く考え印象が残る。」としている。その他には「私は英語が苦手で言葉がうまく理解できなかった。しかし訳した文章から心に秘めたことが曲にして伝わるのでできたと思う。歌の力はすごい。」「歌詞を和訳することでLukaの気持ち、場所、臭いや温度などが伝わってきた。」との記述も見られた。言葉・文字主体の講義に対する率直な意見としては⑧「冗漫講義脱却効果」を挙げたものが3名(4.3%)に見られ、「音楽がすうーと心や頭に入ってくるから分かりやすかった。90分の長い授業の中で音楽を聴くことでリフレッシュできるし興味も持ちやすい。」と述べている。中にはこの歌が気に入って音源を入手し何度も聴いている1名(1.4%)がいた。記述としては「歌詞を訳して意味を知り良く頭に入った。曲を聴きながら中身をしっかりと聴こうと思った。その後何度も聴いている。」であった。

なお、問3.「曲を聴くことが理解に役立った人はなぜ理解に役立ったかを書きなさい」に1名(1.4%)のみ、音楽が理解に役立たなかったと回答した学生がいた。幸いにもその回答欄の脇に書き込みがあり「器楽は好きだけど歌が嫌いなのであまり興味が湧かない」との感想であった。

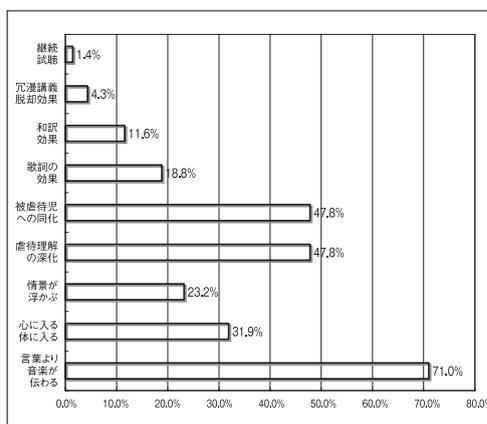


図3 「曲を聴くことが理解に役立った人はなぜ理解に役立ったかを書きなさい」への自由記載内容内訳(重複集計)

IV 討論

1. 歌による記憶効果

問1の「虐待を受けた子の特徴を書けるだけ書きなさい」、に正答した個数は、歌を聴いた実験群が聴かなかった対照群より統計学的に有意に多かった。なお、実験群・対照群ともに配布した講義プリントで、虐待の具体的な記事や事例を出し虐待親や子どもの心境について触れ、さらに被虐待児の特性についても講義している所以对照群といえども被虐待児の特性について必要な情報は十全に入るように配慮していた。にもかかわらず、両群間に差が出たことは、歌を講義に援用することが講義内容の理解や内容の記憶に有用であることを示している。実験群に講義時に配布した音楽プリントに与えた課題である「Lukaはどんな目に遭っているのか。」や「Lukaは誰と話しているのだろうか。」などの課題討論から学生は「If you hear something late at night」にある“you”がLuka自身で、誰にも言えない虐待の苦悩を独白する、そして被虐待児は他者に虐待の事実を秘匿する性向があることを翻訳しながら発見していった。また、「何が起きているかを具体的には言わないで、Some kind of trouble, some kind of

fightと表現しているのはなぜだろう。」の課題でも秘匿を貫いていることを発見する。また、「Lukaはこんな目に遭っているのは誰のせいだと言っているのか。」でも、“It's because I'm clumsy”と、気が利かない自分が折檻を受ける理由なのだ自分を責め、虐待親を責めない様子を学生は訳出しながら見出しにいった。さらに、学生は「Lukaはなぜ暴力あふれる自分の家に戻って行くのだろう。」の課題討論から、いたいけない子どもは自活能力もなく、結局は暴力あふれる親元に帰るしか選択の余地がないことを知ることとなった。こうした課題を伴って歌を聴いた実験群では対照群に比べて自己開示の抑制、低い自己評価、被虐待事実の秘匿、虐待者秘匿、自罰傾向など、歌詞の内容に関わる項目の記載が目立った。

2. 歌が心に「入る」という体験

問2の「Lukaの曲を聴いたことは虐待の理解に役立ちましたか」、に対する回答では役に立ったが75.7%、どちらかという役に立ったが22.9%の計98.6%と80名中79名が歌の効用を肯定した。その効果を問う「曲を聴くことが理解に役立った人はなぜ理解に役立ったかを書きなさい」、を自由記載させ、主な記述を分類して図3に示したが、言葉を主体とした講義では得られない効果が歌によってもたらされていた。記述文字に制限を加えたにもかかわらず71%が「歌ですーと心に（体に）入ってきた（響いてきた）」の表現に象徴されるように、言語メッセージと異なる回路で学生にストレートに了解されていることがうかがえる。その他にも「まるで被虐待児の立場に立てたような気がする。」「被虐待児の心の世界が目に見えるように浮かぶ。」などの臨場感あふれる記述が目立った。特に「虐待を受けたことのない私は虐待を学べるが虐待された人の気持ちは分からなかったが、曲から気持ちが分かることができ

た。曲の方が言葉に色がついて心に入りやすい。」との記述は「言葉に色が付く」と歌の持っている訴求の強さやイメージの伝達能力の高さを物語っている。さらに「虐待を学ぶ」という態度から突き抜けて「被虐待児の心に触れる」という同化・共感的理解に及んだものもある。こうした同化は「この曲の最後、親元に戻るLukaが切ない。」の記述にもあらわれている。また他の記述にある「歌によってまるで被虐待児の立場に立てたような気がする。このような子が沢山いて、それを歌にもできず気持ちを抑えている子の未来が心配。」と、まるで親や保護司のように子ども学科で学ぶMissionにまで思いを馳せている例が見られた。制限された字数で回答させたにもかかわらず歌がストレートに伝わることや深い理解につながることを伺わせた。佐藤⁵⁾は音楽の心理学的効果についての論文で「作品から刺激を受けて誘発された主体や客体の無意識的イメージを知覚している」、と推測している。子ども学科の音楽担当土田は、その論文「子どもの情操と音楽の役割」⁶⁾の中で、祖国を追われてうちひしがれ、しかし音楽に託して優しく微笑むラフマニノフの曲を楽譜とともに紹介した。しかし著者は音譜を読んでもイメージが湧かず、教えを請うた。土田は自室のアップライトピアノの蓋を開けるや、その5小節を奏でたが、その途端に鬱々と悩むラフマニノフがようやく頭をもたげ、作曲家として再生の道を歩み始めるイメージがいきいきと浮かぶ体験をさせていただいた。論文を読み切っても理解できないものが楽の音で一瞬にして体に染み渡ったのである。

また歌の歌詞やそれを翻訳する過程で「私は英語が苦手で言葉がうまく理解できなかった。しかし訳した文章から心に秘めたことが曲にして伝わることでできたと思う。歌の力はすごい。」「や「歌詞を和訳することでLukaの気持ち、場所、臭いや温度などが伝

わってきた。」など、次々に被虐待児の心の暗黒を訳出しながら発見していくことも、虐待の理解や被虐待児への同化に重要な役割を果たしていることが明らかとなった。

3. 講義に採用する歌の選択

ただ一人、問2.「Lukaの曲を聴いたことは虐待の理解に役立ちましたか」、に役立たなかったと回答した学生がいた。幸いにもその回答欄の脇に書き込みがあり「器楽は好きだけど歌が嫌いなのであまり興味が湧かない」との感想であった。たった一人の反論といえども無視できない。学生を一群と見てしまうところに教員の陥穽がある。あくまで個人で構成されている学生を集団で捉えるのではなく歌詞が入っている音楽が好きになれない人がいることを配慮しなければならない。曲によっては著者にも同じ体験があるからで、これを配慮して、用いる歌の選択は第一義にその曲の高い音楽性を基準に置いている。講義題に結びつく歌詞の候補はいくらでも発掘できるが、メッセージ性が高いと一般に思われている曲の多くがお説教に近い饒舌な歌詞で、かえって学生が受け付けない。試みに著者が今日まで使ってきた歌のリストを表1に掲げた。

これらの歌の選択基準は1.メロディとリズムに調和がある、2.歌い手の感性がその曲と合致している、3.歌詞が感情に流されない節度を持つ、などに置いている。例えば“I've never been to me”は男性社会に翻弄された女性が自由を求めて苦闘する姿を歌っているが、歌い手のCharlene自身がこれに近い人生を歩んでいる分、その切々たる思いが伝わる。内容と裏腹に長調で伸びやかな歌声であるが、逡巡しながらも生き続けようとする希望を秘めた曲として完成されている。本研究で用いた“Luka”もSuzanne Vegaがストリングスとドラムが織りなすシンプルなメロディに乗せて淡々と歌い切っており、虐

表1 子ども学科授業展開に用いている音楽教材の例(岩倉)

歌	科目	テーマ
I've Never been to me 唄: Charlene 詩: Ron Miller 曲: Kenneth Hirsch	基礎 演習 I	Maternity blue や産後うつなど女性の孤立による育児の困難 自立した女性として子育てを行う困難さ 男性優位社会に立ち向かう女性
Mother 唄詩曲: John Lennon	精神 保健	幼児期の母性剥奪というトラウマ 唄うことによるトラウマの修復と再生
ゆりかごの歌 唄: 学生で合唱 詩: 北原白秋 曲: 草川信	小児 保健 実習	睡眠における入眠環境の学習 学生の乳幼児期の子守歌想起を通して午睡時保育士による園児への睡眠促進トントンの役割を実習で実感させる
ママのお膝 唄: 学生で合唱 詞: 坂口淳作 曲: 平岡照章	小児 保健	授乳をキーワードに育つ母子相互作用 第二の子宮から子どもの出撃基地へ ♪「いつでも私がだっこすりゃおいしいおっぱい匂います」の絶対受容を体感する
濡れた揺りかご 唄・詩・曲: Cocco	精神 保健	思春期心性と母子分離不安 ホルモンシャワーを浴びた少女の不安
Summer time 唄: Gail Gilmore 詩: Divose Heyward & Ira Gershwin 曲: George Gershwin	精神 保健	母子交流と対象恒常性 貧しい父母がただただ寄り添って育てた子どもがある日の朝羽根を拡げて空高く飛び立っていくまでを歌い上げた子守歌
君を乗せて 唄: 井上あずみ 詩: 宮崎駿 曲: 久石 譲	精神 保健	対象恒常性と子どもの社会的自立 ♪「父さんが遺した熱い想い、母さんがくれたまなざし」という Inner mother を心に宿した少年が一人で自立の旅に出る
命の別名 唄・詩・曲: 中島みゆき	精神 保健	言語発達と思春期心性 ♪「けれど最後まで覚えられない言葉もきつとある」豊かな養育を受けられなかった人がもつ言葉の不確かさとその再生

待に無力な子どもの諦観が伝わる。表1に選んだうちの3つは Singer-songwriter のもので、曲想と歌詞、その心情が一体となっているために選択された結果であろう。では、なぜ虐待を受けたわけでもないSuzanne Vegaが見事に虐待の本質をとらえているのだろうか。タレントあふれるこの Singer-songwriter は1980年代に増え始めた米国の虐待報道に触れることで直感的に虐待を受けている子どもの心情に情動調律できる能力を備えている、と言える。虐待を、言語を通じた知識として学ぶ若い学生と、これを直感的に理解してしまう才能あふれる音楽家、このギャップはやむを得ないが、だからこそこうした音楽が学生に単なる知識以上の理解と訴求をもたらすとも言える。

メロディとリズムに調和があるという歌の選択基準も、しかしながら一律ではない。John Lennonの“Mother”では導入部で見捨てられた幼い自分をつぶやくように唄うが、中途からは母を呼ぶ“無様”な悲鳴にか

わる。しかし、こうしたメロディやリズム破綻のなかに、見捨てられ不安を抱えて生きている Lennon への共感を聴衆は覚えるのであろう。

4. 歌による伝達のシエマ

講義に歌を援用することの意味をより視覚的に理解するために図4のシエマを描いた。実体験が未だ少ない学生は、授業から虐待の定義や分類、被虐待児の所見や特性、防止法などを学習しても、被虐待児の受ける深刻なダメージとその心情に同化・共感的理解を伴わないと、知識の水準でとどまりがちである。

一方教員は教えたい主題に関わる知識はもちろんのこと、その主題にまつわる記憶や体験などの表象世界⁷⁾を持っている。それはヴィゴツキー言うところの内言語的な拡がり^{8,9)}をみせている。例えば「母」という言葉が浮かんだ途端、田舎のあぜ道をおぶって貰っていたぬくもりと揺れ、母の体臭、そして話す都度母の背中から子どもの胸に声の振動が響いた記憶が湧いて出る、というようなことである。しかし教師が「母」を言葉として発しても、また配付資料に書いても、それは外言としての母、つまり広辞苑に出ている「おんなおや・子のある女」に縮小されて学生に伝わる。受け手の学生には外言としての母に教師がどんなイメージを色づけているかは不明なので、知識として止めおくか、仮に内言としての「母」を学生自身の表象世界に再生しても学生固有の母イメージで解釈することになる。それはあぜ道で自分をおぶる母では既になく、例えば「ごはん食べ散らかしたらダメでしょ」とか「台所なんか来なくていい、あんたは勉強だけやんなさい」、と小言の多い母、としてしか再生しない。つまり講義を言語に頼る限り、教師と学生が「母」概念を共有できるのは広辞苑的な範囲から大きく出ないという制約がつきまとう。図にあるように結果として単なる知識としてしか学

生に留まらないのであれば、学生は「賢く」はなっても「優しく」や「寄り添う」成長には結びつかない。それどころか歌無しの群のように覚えたはずの被虐待児特性が、わずか4週間の間に忘却の彼方に行ってしまうことさえある。しかし教師の言葉に歌が添えられたとき、「心にすーと入ってきた」と記述されたように歌に託された非言語的なメッセージ(その歌にこめられた表象)が仲介物となって学生の表象世界に入り込む。そして、その中でたくさんのエコーを起こしながらより拡がった表象世界を創り出し、共感的理解を促進する可能性がある。つまり歌は外言では届かない教師の内言的な表象世界を届ける機能を持っており、学生の心中での反芻が記録にも良い結果をもたらすと考えられる。

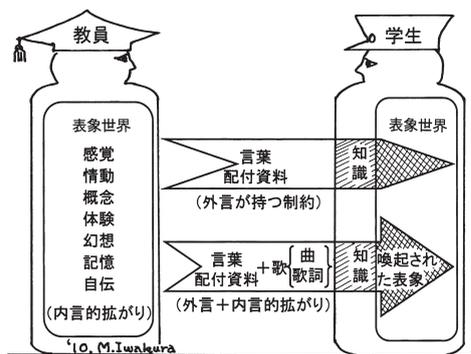


図4 講義に歌を用いることによる学生の表象世界の拡大と深化のシエマ

5. 音楽と感性

Levitin¹⁰⁾は“*This is Your Brain on Music*”の巻末を「具体的な考えを行動に移すための道具としては、音楽より言語の方が役に立つ。しかし気持ちや感情を高める道具としては、音楽は言語よりすぐれている。この二つを組み合わせるなら誰にとっても最強の求愛行動になる。」で締めくくっている。さらにシアーズは「音楽の世界は、やっと感じられるほどの反応から、人間行動の最高レベルを行く知的な介入と瞑想にいたる、特有な感性的体験

を提供する」と述べた¹¹⁾という。我々が言葉をやりにする講義に伝えきれない想いと願いを届けるために、また、学生の深い理解と豊かな感性を育むためにも音楽の活用が有効であると言えよう。

長らく医療実践と保健研究に従事していた著者は2007年本学に着任し、音楽や造形の教員と学科をとにもするという機会を得た。そこで感じた講義や実習の進め方についての意見の相違などを期に、幸い子ども学科が互いの領域活動に参加できる雰囲気であったことから、合唱や管弦楽の練習、造形の授業、舞踊の練習の場に足繁く通った。その教育の迫力と、受講・参加する学生の集中に圧倒され、この分野が学生を引きつける魅力の理解に努めた。そして担当教員との率直な対話も試み、時に対話を記録に留めて交換しあった。この学びを通して自分の講義に音楽や詩、描画活動を活用する講義形態を模索しながら積み上げてきた。しかしこれとても、たかだか自分の講義枠の中に表現系手段を導入したというちっぽけな工夫に過ぎない。1901年ドレスデンでひらかれた第一回芸術教育大会で司会を務めたザイトリックは「われわれの目的は、現代の知的陶冶に偏した教育的欠かんと、芸術的陶冶によって補おうとするものである。」¹²⁾と、述べた。また、飯田は著書「音楽リズム」に「子どもの感性と表現の力は、そのまま保育者の感性と表現の力の反映である。」¹³⁾と、子ども教育にたずさわる学生にとっての音楽を、資格技術としてではなく、学生の感性を錬磨する必須の手段とみなすべきであることを教えている。尚絅学院大学は2010年子ども学科の創設に伴い短期大学部の保育コースと音楽コースを2011年に無くす予定である。この二つのコースが本学の誇る合唱・管弦楽活動の実質を担ってきたと言っても過言ではない。永年積み上げたその伝統を引き継ぎ、それだけでなくシラバス全体がこうした感性を育む大学でありつづけた

い。子ども学科音楽担当の高木は「保育者、幼稚園教諭養成教育の神髄である子どもと共に遊べる感性、この感性を育むのは知育教育だけでは無理。それに手を届かせる可能性のある教科こそ音楽教育でありたい」¹⁴⁾と述べている。理論系の教育を担う著者も、こうした表現系を担う先生から学びながら自分の講義を一層深め、学科としても両者がさらに深く連携するお役に立ちたいと願っている。

なお、この論文内容の一部は2009年第48回全国保育士養成協議会研究大会で発表¹⁵⁾した。

謝辞

本研究のために「保育内容と指導法－健康」の授業の一部を割いてご便宜を図っていただいた子ども学科安藤正樹先生に感謝いたします。

また著者の着任から今日に至るまで、音楽についての素朴な質問や対話に辛抱強く付き合っていていただいた今井邦男、高木和男、土田定克の各先生に御礼申し上げます。この対話無くして本論文は生まれませんでした。心から感謝いたします。

文献

- 1) 尚絅学院大学：尚絅学院大学学生生活 Guide Book2010年度入学生用. 2010. 36
- 2) 東京学芸大学：「小学校の教科に関する科目」の授業の意義と方法、小学校教員養成科目(小科目)に対する担当者からの提言、教科名(音楽研究)、筒石・横山・中地、www.u-gakugei.ac.jp/2010/8/23 閲覧
- 3) 中村和男：ヴィゴツキーの発達論、東京大学出版会. 1998. 133-180
- 4) 岩倉政城：口を窓口にした連携－教育としての保健実践から－、第4回日本教育保健学会講演集. 2007. 15-20
- 5) 佐藤淳一 Jungの心理学的タイプにおける質的検討の試み－半構造化面接、共感イメージ課題絵画および音楽作品に対する感受性を通して、心理臨床研究. 21. 2003. 496-507

- 6) 土田定克：子どもの情操と音楽の役割 1) -宗
教的観点から見た子育て-. 尚綱学院大学紀
要 .56.2008.195-206
- 7) D.スターン (馬場禮子・青木紀久代訳)：親-乳
幼児心理療法-母性のコンステレーション-. 岩
崎学術出版社 .2000.11-70. The motherhood
constellation - A unified view of parent-infant
psychotherapy.-HarperCollins Publishers. 1995.
- 8) ヴィゴツキー (菅田洋一郎監訳)：子どもの心は
つくられる. 新読書社 .2000.59-91.
- 9) 高木光太郎：ヴィゴツキーの方法 -崩れと振動
の心理学-. 金子書房 .2001.155-164
- 10) D.レビン (西田美緒子訳)：音楽好きな脳. 白揚
社 .2010.338. Daniel Levitin: This is Your Brain
on Music. Dutton. A member of Penguin
Group. 2006
- 11) 櫻林仁監修：音楽療法入門 .芸術現代社 .1978.182
-186
- 12) 供田武嘉津：世界音楽教育史 .音楽の友社
1976.175-178
- 13) 飯田秀一編：音楽リズム .同文書院、1990. まえ
がき1-2
- 14) 高木和男、岩倉政城：高木先生との障がい児と
音楽についての対話メモ (3/12,3/13 合本) . 未
発表 .2008.
- 15) 岩倉政城、安藤正樹：音楽的感性を通して保育
科理論系授業の理解を深める
-虐待児の心情を歌った曲“Luka”の訳とCD鑑
賞課題の教育効果-. 全国保育士養成協議会第48
回研究大会研究発表論文集 . 全国保育士養成協
議会 .2009.128-129